

『栄花物語』 絵入抄出本の本文を抄出したのは誰か

中村康夫

要旨

架蔵の写本『栄花物語』は、江戸時代初期に版行された絵入抄出本と同じ本文を持つ。奥に「季吟するす」の識語があり、調査を進めると、季吟は季吟本と称される『栄花物語』の一本を所持するなど、季吟が『栄花物語』にかなり高い関心を持っていたことが確認された。また、異文等の内部徴証から版本を書写して当該写本が生まれることは難しいとの判断に達した。

さらに、文字が同一人物の文字と見えるほど相互に酷似している。そうすると写本の書写者と版本の版下作成者とが同一人物ということになるが、雲英末雄氏は季吟が自著の版下を染筆していると指摘しておられた。

松村博司氏の研究に戻ってみると、松村氏は絵入抄出本の刊行年をほぼ推定しておられ、その刊行年は季吟の年齢からして人生の熟した時期にあたるということが判明した。また、季吟ほどの人物であれば、『栄花物語』の本質を損なわないように『栄花物語』から本文を抄出することは可能であると言える。

それらのことを総合すると、あくまでまだ可能性の範囲内ではあるが、高い可能性があることとして、北村季吟は江戸初期に抄出本文の小さい『栄花物語』を作り、絵を入れて読みやすくし、『栄花物語』の享受に大きく貢献したといえることになる。

はじめに

『栄花物語』は『源氏物語』に続く平安時代の物語文学作品であり、『源氏物語』が書かれた時代、あるいは『源氏物語』がモデルとした時代の歴史の実際を紹介する機能も果たしつつ、単独には歴史書としての役割も担いながら、長く読み継がれてきた。

また、『栄花物語』は全体のボリュームを三分の一にした抄出本文によっても読まれており、それには挿絵も添えられて、歴史をわかりやすく享受する便利さもあるので、必ずしも『源氏物語』とは重複しない読者層にも支えられていたのではないかと思われる。

しかしながら、本文を抄出するには全体を熟知し、歴史全体に対する高い見識も持っていなければならない。したがって、本文を抄出した人物は『栄花物語』を何回も読んでおり、加えて、平安時代の特殊な歴史について幅の広い知識を持っていることが必要になる。

それは誰か。

そして、それを考えると同時に必要なことがある。それは、本文を抄出する人物は、そもそも本文を抄出しても賞翫するに値する作品性は残るといふ文学論的見解をも持ち合わせなければならない、ということである。

『日本紀略』という歴史書があるが、この前半は六国史からの抄出であるということはよく知られている。つまり「日本紀」の「略」本だという意味かと思われる。

そういう発想にヒントを得るならば、日付によって書き留められる基本的な歴史記述は、要約して不必要なものを

いっばい削除していくことが可能になるということになる。

ましてや、『栄花物語』は日付を記述するところもあるが、日付は基本的な必須事項ではなく、要するに日付を跨いでどういふことがあったのかを書くことに主眼があるので、「略」本化することは本質的な要素として持っていたと言えるのかもしれない。

さて、そういう感性と素質を併せ持つ人物とは誰か。

絵入『栄花物語』についての研究

版本絵入九冊本については、まず、諸本という観点から松村博司氏のご研究がある。古くは刀江書院刊の『栄花物語の研究』があるが、最も新しいものは、風間書院刊の『栄花物語の研究 校異篇』である。その続篇（昭和63年刊）に『栄花物語』版本絵入九冊本について最新の成果を記述している。

その他の先行研究としては、中村が平成17年に国文学研究資料館の紀要31号に書いた『『栄花物語』絵入版本について―抄出本文から考察する』のほか、平成21年と22年に実践女子大学の横井孝氏、上野英子氏にも実践女子大学文学資料研究所年報に書かれた本文の翻刻など関連の研究がある。

また、北村季吟に関しては、滋賀県野洲市の野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）が作成した北村季吟の没後三〇〇年記念展の展示図録に、研究書一覽などまとめたものがあるのでそれに譲りたい。野洲市は季吟の生地とされている土地である。

以上であるが、いずれにしても、本論は絵入版本『栄花物語』について論ずることが主になるので、松村氏のご研

究以外は、直接関わるものはない。

絵入九冊本『栄花物語』について

『栄花物語』は四〇巻であり、絵入九冊本『栄花物語』もすべての巻の本文を持っているので四〇巻にはなるが、本文を全文持っているのは二つの巻だけで、他はほんの一部しか抄出していない巻も多く、全体としてはかなり小さくなっている。具体的にどれだけ省略されているかについては、草稿に一覧を載せたので、それをご覧いただきたい。絵入九冊本『栄花物語』の本文は抄出本文であるが、本文抄出の理由については、跋文に「事ひろきにより」「巻毎におかしきふし又世のためしにもとおもふ所々をかきあつめて座右にし侍ぬ」と書いてある。しかし、単に面白いところを抜き出したというのではなく、歴史書として読むに堪えるように本文の選定が行われており、そのあたりのごことは拙稿をご参照いただきたい。

絵入九冊本『栄花物語』は、一冊は「目録并系図」であり、本文は八冊である。

絵は半丁のものを含めて五二面あり、絵を本文が跨ぐことはない。つまり、センテンスの途中に絵が入っているという形はない。必ず内容の切れ目にある。当然、文章は直前で切れている。

架蔵の絵入版本は、表紙は浅縹で草花の型押がある。用紙は楮紙、袋綴で、縦27.1cm、横19.3cmである。要するに普通の版本と思われるが、少し大きい目というのが正しいかもしれない。

本文は一面一二行書で二行は約二五字である。

書肆名としては「京師三條通升屋町／御書物所／出雲寺和泉◎」とある。

『栄華物語詳解』（図1）はこの絵入九冊本『栄花物語』の本文を高く評価しており、相当な知識人が関わったことを想定している。本文抄出者として三条西実隆を当てる言い伝えを紹介しているが、学説としては不確かであると退けている。

松村氏の新しい研究成果

松村氏の新しい研究成果は、『栄花物語の研究 校異篇 続篇』の「解説」に「補説」として書かれている。

松村氏は「九卷抜粹本」とか「九冊抜粹本」といったりしているが、良いところを選んだという意味の抜粹という言葉が正確かどうかは疑問とせざるを得ない。先にも掲げたが、跋文に書いている「巻毎におかしきふし」というのがどういう意味かは改めて考えてみる必要があると思われる。ただし、それが、歴史書として意味のあるところという意味であるならば評価できると思われる。

また、松村氏は、絵入版本の本文を流布本系統第一種（例 西本願寺本）と古本系第二種（例 陽明文庫本）との混合本であるとしておられる。本論が後に論を展開するように、誤りのある写本をベースに出版企画を立てたとき、誤りを修正できる良い写本を参照することにし、正しい本文を定めながら進めたとすれば、この混合本という指摘は頷けるものがあり、同時に、『栄花物語詳解』が良い本文であると絶賛したことも首肯できるので、この点も大事なポイントとして注意しておきたい。

さて、大事な点は絵入版本の刊行の時期である。

松村氏の記述を紹介すると、だいたい以下のようになる。

まず、吉田幸一氏からの教示があり、貞享二年（1685）板『広益書籍目録』巻二に「九 栄花物語抜粹」、元禄五年（1692）『書籍目録』に「四十一 栄花物語 九同抜書」とある。また、「九巻抜粹本」の挿絵の中に絵入『源氏物語』（承応三年（1654）版）の挿絵に酷似しているものがあり、絵入『源氏物語』を参考に、それを粉本として作画しているとされる。さらに、「本書が寛文（1661〜）刊から延宝三年（1675）刊書籍目録にかけて未載であることと、承応三年版『源氏物語』の挿画を粉本としているところから見て、延宝三年（1675）以後貞享二年（1685）以前刊ということは確実と思われる。」とされ、かなり厳密にその刊行年を推定された。

絵入『源氏物語』との挿絵の類似については、この程度の類似で粉本という言い方が正しいかどうかは考えてみる必要がある。粉本ということは直接の模写関係を推定することになるが、実際のケースとしては、絵入『源氏物語』と絵入『栄花物語』の挿絵を描いた絵師が共通に見ているもっと古い絵があったということも考えられると思われる。実際に指摘された絵を見比べてみると、模写というレベルではなく、構図が同じというレベルと思われる。こういう関係を粉本という言葉で説明するものかどうか意見の分かれるところかと思われるが、いずれにせよ、このことを根拠にして『源氏物語』のほうが『栄花物語』より先だと考える必要はない。

しかし、出版の流れからして、『源氏物語』で成功した絵入り本の形を『栄花物語』にも適用したという方が考えやすいと思われる。そういう意味では基本的には『栄花物語』が『源氏物語』より後という考え方で大過ないと思われる。このことは強い根拠にはならないが、刊行年の推定とも合わせ考えて、ほぼ、絵入『源氏物語』刊行の後に、さほど離れない時期に絵入『栄花物語』が刊行されたと考える判断でよいと思う。

なお、松村氏の指摘された絵については、松村氏の『栄花物語の研究 校異編 続篇』に掲げられているので、ここでは掲出しない。

架蔵本写本『栄花物語』

金襴綴子の表紙で用紙は鳥の子紙。列帖装。縦23.6cm、横17.0cm。絵入り版本よりやや小型で、本文は一面一行書。一行約二二字。江戸初期から中期のものと思われる。

八冊である。本文は絵入九冊本『栄花物語』とまったく同じである。文字はほとんど字母まで同じである。厳密にいうと、字母は数パーセント程度異なっている。ただし、「目録并系図」の冊と跋文はない。

本文としては、版本では、同じ巻の中の途中で省略部分がある場合、次の始まりのところには行頭の上に「○」印があるが、写本ではそれがない。

絵はない。絵入版本では絵のある箇所には、写本では絵の枚数分だけの白紙があり、白紙は糊付けされている。単にページ捲りをしているだけだと、一見、絵の丁はないように見える。しかし、実際は絵があり、剝がされたのではないかと思われるような糊痕がある。絵の中には半丁の絵のところもあり、そこは糊付けされていないので版面が見えるが、そこには何かが貼られていたけれども、貼られていたものが剝がされたとしか考えられない糊痕がある。そして、絵の箇所の直前について見れば、一二箇所については散らし書きになっている。他の箇所は散らし書きでなく通常の書き方で書き留められ、半丁の初めは文字が書かれていて、文字が終わるとそこから後ろが白い状態になっている。

また、一箇所については絵の枚数の半分しか白紙がないところがある。列帖なので切り取られたわけではないことが確認できる。もとは絵の枚数だけ白紙のページがあったものが切り取られて枚数が少なくなっているとは考えられ

ない。

写本には奥に識語があり、「季吟しるす」と書かれている。これはどう見ても書写者とは異筆である。

考 察

○識語から

さて、どういう順に考察を進めるかであるが、まず、「季吟しるす」という識語から考察を初めて見たい。

「季吟しるす」をどう考えるかは難しいが、ごくごく普通に考えて、この美しい装丁の写本はもともと箱などに入っていたと思われる。それが何らかの事情で箱を失うときに、箱の中にあつた紙に書かれていたか、箱書きにあつたかの情報が書き残されたものではないかと考えられる。もちろん、これは実見したわけではないので、想像に過ぎない事柄に属するが、可能性としてはかなり高い可能性を持つものと考えている。

あれだけ王朝物語関係に注釈等の著書の多い季吟であるのに、季吟には栄花物語関係の著書は認められない。季吟と『栄花物語』との関係については、まったくなかったとはいえず、『栄花物語』の伝本について調べてみると意外にも見つかる。それは季吟本『栄花物語』と呼ばれている本があつたということである。

季吟本『栄花物語』とは校異の一本として掲げられていることから、季吟所持本であつたことは間違いないと思われる。それは季吟が書写した本かどうかまでは分からない。

季吟本『栄花物語』のことは伴信友校本（ノートルダム清心女子大学本奥書）に見え、『栄華物語詳解』にも季吟本栄花物語の名称は見えている。季吟が『栄花物語』をかなり読んでいたことはよく知られていたことだったのだろ

うか。

因みに、季吟の生没年は寛永元年（1624）生、宝永二年（1705）没である。松村博司氏が推定された絵入抄出本の刊行推定年次（延宝三年（1675）以後貞享二年（1685）以前刊）には、季吟は五十二歳から六十二歳ということになる。

しかし、今日的な感覚に過ぎないのかもしれないが、少なくとも、『栄花物語』という作品名から、北村季吟という人物の名前をたぐり寄せることは通常の知識ではまずないと思う。調べれば季吟も『栄花物語』の写本を持っていることはたどり着くことができるけれども、周知のこととして、『栄花物語』といえば北村季吟というふうにはならないのではないだろうか。北村季吟という人物の名前からは、むしろ平安朝の作り物語である『源氏物語』や『伊勢物語』の注釈が主で、作り物語ではないものとしては和歌や『枕草子』はあるものの、歴史がかつた文献からは物語などとは違って『栄花物語』と季吟との間には距離を感じるといのが普通の感覚ではないだろうか。したがって、何の根拠もなくここに季吟の名を書くことは考えられないと思うのである。少なくとも、『栄花物語』の写本に関わって北村季吟の名前を書いても、写本の価値が高まるという発想には簡単にはならないのではないだろうか。誰の名でもよく、本の価値を上げようというだけならば、もっとそれらしい歴史系の人物を持つてくるのが普通だと思われるのではない。

○写本が先か版本が先か

さて、次に、本文が同じであるということから、写本が先か、版本が先かについて考察に入りたいと思う。

この本文は、抄出本文であり、フルサイズ四十巻の『栄花物語』からいきなり抄出本文の版本が生まれるとは到底

考えられない。まず、抄出本文の写本を作って、それから出版に入るのでなければ、筋道が説明できない。

しかし、その一方で、『栄花物語』は書名からして嫁入り本としてもよく用いられ、装丁の美しい本はそれらしい雰囲気を持っているので、小さいサイズである抄出本文の写本を作って、嫁入り本にしたという可能性も大いに考えられることである。ただ、管見に及ぶ限り、フルサイズの四十巻の『栄花物語』は多く目にするが、この抄出本文の簡易版ともいべき本文を持つ写本は見たことがない。『国書総目録』で見ると、八冊の写本も少しはあるので、それがこの絵入抄出本と同じ本文を持つものである可能性はあると思われる。だが、現時点では、中村は原本を見ていない。

要するに、問題は、手元にある写本が、版本の写しと考えて矛盾がないのかという点を明らかにすることが重要な点だということである。

さて、写本が版本の写しではないかと考えるに当たって、考えておくべき点をいくつか掲げておきたい。

まず、元の『栄花物語』が九冊であるのに、「目録并系図」の冊を不要として八冊に縮めるだろうか。つぎに、跋文には本文を抄出本文にした理由が書いてあるが、なぜそれを省略したのだろうか。つまり、出版に際して、一般の読者が読みやすいように「目録并系図」の冊を追加したり、出版情報を整えるという意味からも跋文を用意したり、書肆を入れたりというのは説明が簡単なのである。逆に、系図などはその最たるものだと思われるが、読みやすくなる情報を省略するというのは、読まれることを前提にしていまいか、平安時代に関して相当な知識を既に持っている人物が使うかどうか想定されていなければならないと思われる。相当な知識人を想定するならば、フルサイズ四十巻の『栄花物語』が用意されるべきで、こちらのほうはやや考えにくいといわなければならないのではないだろうか。

○文字がそっくりであることについて

さらに、写本は版本と瓜二つの文字で書かれているが、そっくり同じように書こうとしたのであるならば、逆に、それにしては字母の異なる文字が多すぎるといわなければならぬ。ほとんど字母まで同じとはいっても、字母の異なる文字はすぐに見つかるくらい多い。別人がそっくりの文字で書写していて、気分次第でところどころ字母の異なる文字に書き換えるなどということがありうるだろうかということである。

そこで、ここでは、文字がそっくりであるという点に焦点を当てて考察してみたいと思う。

有名な版本に『扶桑拾葉集』がある。水戸光圀が少数数刷ってはしかるべき人物に贈ったとして知られており、ただ、少数数しか刷られなかったために、ほしい人は借り出して書写したということでも有名である。この写本の中にはできるだけ版本そのままに写そうとしたものがあり、言うまでもなく、字母まで完全に一致する。それどころか、紙の大きさから配字配行まで完全に一致する。なかなかよく書写されていて、ぼーっと見ているとこれも版本ではないかと判断を誤ってしまいそうになるが、じっくりみると、いくらそのままに書写しようとしたとはいっても、筆の勢いは異なるところを指摘でき、版本と同じ文字だと見間違えることはない。

それに比べれば、今、手元にある写本は、版本と同じ文字であり、通常感覚では、同一人物の文字であると判断する方がまっとうではないかと思えるほどである。

版本を手元に持っている人間が、もう一部ほしいと思って同じ本文を書写し、それを嫁入り本にしたという可能性はないとはいえないので、別人である可能性をここで一気にゼロにするつもりはないが、書写の態度が不自然であるということと、そこまでそっくりに写そうとして、どうして写本にだけ誤りがたくさん指摘できるのかという問題がどうしても説明できないと思われる。この誤りについては、後に詳しく述べる。

ただ、いろいろ考えても、写本が先あって、それを元に版本の出版計画を立て、本文の誤りに気づいていたので、それを正すべく参照するに足りる一本を探ってきて手元に置き、本文に修正を加えて版下を作成したと考える方が、何もかもすんなりと説明できることだけは確かである。

○絵の丁数が異なる箇所について

版本に絵が描かれているところについて写本はどうなっているか調べてみると、すべての箇所について絵の枚数分だけ白紙がある。しかも、何かが剝がされたと思われる糊痕が認められる。普通に考えると、版本と同じ絵があったと推量するのが適当なところかと思われる。

しかし、一カ所だけ枚数が合わないところがある。それは十七巻・おんがくの法成寺金堂供養の有様を描いた絵で、版本では見開き四面続いて絵が描かれているところが、写本では見開き二面しか白紙がない。白紙の分が大きくなりすぎるので切られたかと思って調べてみると、列帖装なので切られていないことが確認できる。

版本が先にあり、写本はその写しであると考えられるならば、一カ所については絵の枚数を半減したことになる。なぜここだけ絵の紙幅を半分にしたのか、説明がつかない。逆に版行されたのが後と考えるならば、そこは著名な行事の絵なので、絵が容易に補えて丁数を倍にしたということになる。

こういう点からも、写本が先にあったと考える方にやや部があると考えられてくる。

○絵に関連して

半丁の絵のところを注意深く見てみると、絵が貼り付けられた時に、絵を描いた墨が濃過ぎてそのまま本紙に写っ

てしまったのではないかと見えるところがある。また、写ったその線は向かい側の本文のある丁にも対称的に写っており、これは、乾き切らないうちに閉じたために写ってしまったのではないかと見られる。ここの絵の個所について、絵入版本ではどういう絵になっているか調べてみると、その絵の線が見事に一致するような絵柄になっている。これと同じように、写った墨跡から、絵入版本の絵と同じ絵があったのではないかと推測されるところがもう一カ所ある。ただ、こちらのほうは、向かい側の丁に墨写りはない。この特徴を全体に広げて解釈すれば、白紙の枚数と言い、ほとんど絵入版本と一致するので、絵入版本と同じ絵が貼り付けられていたと考えるのが通常かと思われる。さらには、墨写りができるほどならば、用紙はかなり薄いものであり、剝がされたその絵はそのまま版下として用いることもできたのではないかと推測させる。

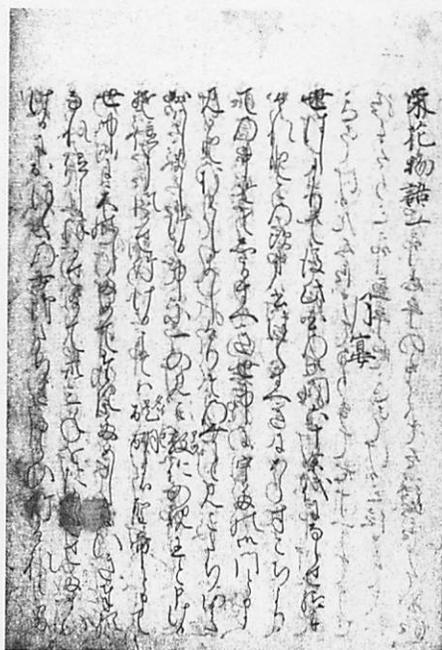
絵入版本の絵は四角い枠の中に絵が描かれているが、当該カ所の絵の枠のサイズを測ってみると、縦21.7cm、横16.0cmであった。写本は縦23.6cm、横17.0cmであるから、上下各1cm、左右各0.5mmの余白を置いて、ほぼ紙面全体に広がる絵であったことになる。墨写りの跡かと思われる線の伸びからも、紙面いっぱい絵が推察されるので、本写本と絵入版本との関係は相互に相当近い関係にあったと考えられると思われる。

なお、写本に貼られた絵には枠がないのではないかと思われる。ただし、これは、枠の跡が認められないだけで、根拠のある推定ではない。

○本文の異同はどう考えられるか

まず、ルビ、傍注の類である。

基本的に、版本にはある付訓が写本にはないところがある。そして、その逆はない。



【図2】 版本 巻一・月の宴書き出しのページ

栄花物語一
月宴

せりかりてなほいふの門下す念い小かせはなう
せこの夜書きまけくすつ小あしすてらりてれ
すとしてますつせり一は字ぬれ四門もえら
せわろくまうたりとのなとんこしらひすこた
りまうけりかたにのるこ教仁の親まうけり
せは信一はくせ竹しりてては硯の屋高せ
してせり小たのくぬそきんぬき一ふいひる
すはなれ信一はせりてては硯の屋高せ

【図1】 写本 巻一・月の宴書き出しのページ

これは、写本の方に目録・系図の冊がないとか、跋文がないとかいう問題と同じように考えられるように思われる。

つまり、写本が版本から書写する際に不要だと思われたところは省略したと考えられるかということである。また、逆に版本が後と考える場合は、刊行すると決まったときに情報を整備するという意味で付訓を足したとは考えられないかということである。

例えば、巻一・月宴の最初のページでいえば「敦」「醍醐」の付訓である。これは本文の問題ではなく、純粹に読みやすくするか、ルビがなくても誰でも読めると考えるかという問題である。他のところでどちらにもルビがある場合を見てみると、例えば、人名の付訓でいうと、「照明」の「照」に「モロ」のルビがある。写本と版本の先後関係について可能性だけを考えればどちらも可能性は考えられるが、読みにく

円融院」になっている。単に書き手の視力の問題ではっきり見えていなかったから誤写したと考えられないことはないが、村上天皇の「おとこ四五の宮」の傍注であり、安和の変で重要な位置にある為平親王の名前は歴史上の事実としてもかなり著名な事柄と思われるので、知識がなかったためにこんなひどい間違いをってしまったのだろうか。しかし、実際は、このあとの「四五の宮」のところでは「為平公」と書いているので、完全なケアレミスというしかない。これも本文ではなく、理解するために書き足された注記に属するが、うっかり間違っていたものを刊行に当たって正したと考えるほうが極めて考えやすい。

これと同様の現象としては、巻二の本文が始まる前の省略した部分についての説明文のところ、花山院女御低子が薨じたことを紹介し、その記事は省略したと説明するところであるが、写本では「寛和九羊」、版本では「寛和元年」となっている。「元」と「九」は書体が似るので誤写した可能性はないわけではないが、寛和は三年までしかなく、「寛和九羊」というのは無知の世界でしかない。これは「鳥平」と同等の世界であり、一旦正しく「為平」「寛和元年」と書いていたものが、「鳥平」「寛和九羊」と誤写するだろうかという問題である。このことは、写本の書き手と版本の版下の書き手が同じ人物であると推定を進めるとき、まったくありえないこととしか説明できなくなる。

しかし、ここは作品本文ではなく解説本文なので、ルビとは違って、本文抄出の第一段階の本がこれであるという立場からも説明が難しい。つまり、これが情報としてはオリジナルだということになってしまいうからである。低子の死去については、『栄花物語』本文には日付は書かれていない。ただ懐妊八か月で死去と書かれているだけである。だから、この巻の書き出しに入れるべく用意した付箋か何かの原稿があって、それを写す時に「九羊」と書いてしまったとしか説明のしようがない。とうぜん、その原稿は残らないし、どのような字形で書かれていたのかもわからない。ただ、苦しいと思うが、「元」と「九」「年」と「羊」は少し崩しただけの形がよく似ているので、読み誤っ

寛和元年の御書

若元女

寛和元年の御書

寛和元年の御書

寛和二年の御書

寛和元年の御書

寛和元年の御書

寛和元年の御書

寛和元年の御書

寛和元年の御書

たかと説明するしかない。少なくともあまり考えずに写していることだけは間違いない。

以上は、冊子の初めのほうだけを掲げたのであるが、実際の最後まで丹念に異同を追いかけてみると、原本を書写して写本ができたと考えた場合に、こんな誤写はあり得ないと思われる個所がたくさん見つかる。そのすべてをここには掲げないが、追跡して研究される方があればすべてのリストを差し上げる。

【図6】 原本 該当部 「寛和元年」

【図5】 写本 該当部 「寛和九年」

さて、次に『栄花物語』の本文の異同である。

まず、巻頭の一行目を見ていただきたい。図は図1図2を参照。

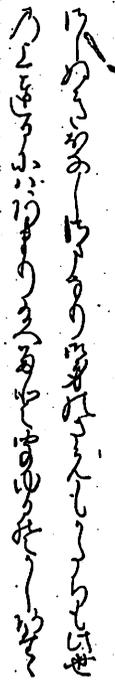
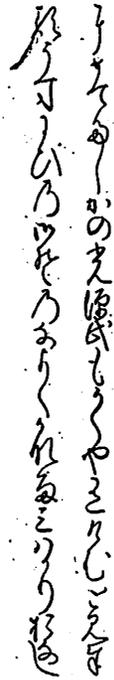
写本は「世はしまりて後此国の御門六十余代にならせ給にけり（改行）とこの次第…」とあり、版本は「世はしまりて後此国の御門六十余代にならせ給に（改行）けれとこの次第…」とある。言うまでもなく、「ならせ給にけり」で文章を切る『栄花物語』は他にない。

「とこ」という言葉は漢字をあてると「常」であり、永久に変わらないという意味を持ち、出典としては『古事記』から見つけられる。天皇の歴代をいうのであるから、「永久不変のこの天皇の歴代…」という意味だと理解できなくもなさそうに思えるが、『栄花物語』諸本を見てもそういう言い回しはなく、「ならせ給にけれとこの次第…」とあったものを「ならせ給にけりとこの次第…」と書写するというのはかなり考えにくいのではないだろうか。むしろ、刊行する際に『栄花物語』では「ならせ給にけれとこの次第…」とあるのが正しい形であると確認をして改めたと考えるのが自然だと思われる。

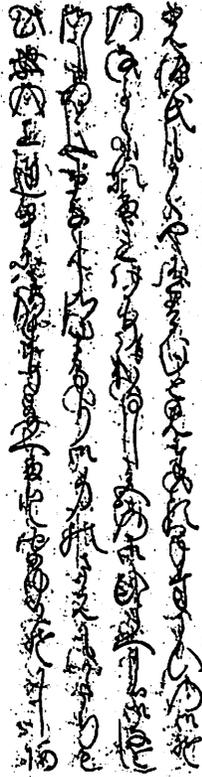
さて次に、版本を書写して写本ができたと考えるほうが説明しやすいケースはないかと思ひ、次の二カ所について異同を検討してみたい。いずれも、版本の画像を先に掲げ、写本の画像を後に掲げる。

まず、巻五・浦々のわかれである。

版本には「なよよかなる三はかりおなし色の御ひとへの御なをし（改行）さしぬきおなしさまなり」とある。写本ではこのうち行末の「色の御ひとへの御なをし」がない。書写したのだとすると何らかの事情で書き落としたことになる。目移りが原因ではないかと考えてみると「おなし色」の「し」と行末の「御なをし」の「し」が原因となっていて、写本も行末に「おなし」がきているので、行末の「し」どうしが妙に形が似ているので、「おなし」も「なを



【図7】 写本 該当部



【図8】 版本 該当部

し」も似ていると思えば、「おなし」まで書いてきて行を変えなければならぬ時に、版本の「なをし」を書き終えた場所と見間違えて行頭の「さしぬき」から書いたと考えるのである。これは可能性としては十分ありうることと思われる。

もちろん、写本から版本へと道筋を考える場合は、刊行に際して本文をきちんと仕上げなるべく、参照すべき一本を用意して整えたので、落としているところは補えたという説明になる。

次に、巻八・はつはなである。

版本を眺めてみると行のほぼ真ん中に「れ」が並んでいる。その「れ」の次の文字「を」から次の行の「れ」までが脱落している。これは典型的な目移りによる誤写だと思われる。

ところが、版本を見ながら実際に書写してみるとどうなるか。書写は元の本がある程度読み取りながら書写が進められると思われる。そうすると誤写のあたりは「君達は」「これを」「いみじき事に」と読まれて書写されていくと思われる。誤脱は「を」から後ろである。何回書写を試みても「これは」にはならない。次の行は「わさなれは」である。この「れ」より前がない。つまり「こ」から「れは」に移ってくるか、「これ」から「は」に移ってこないという誤写にはならないが、通常の書写ではそういうことは起こり得ないのである。一字一字を切りながら書写しないと「れ」のところでの目移りはいくらもない。ここはそんな筆の走りが見受けられる場所でもなく、やはり版本から書写して写本が生まれたと想定していくことは無理なのである。

れあけりあふ人のこころをわづらひて
 くれふげはひのこころをわづらひて
 しんせうりりもるてをわづらひて

【図9】 写本 該当部

れあけりあふ人のこころをわづらひて
 くれふげはひのこころをわづらひて
 しんせうりりもるてをわづらひて

【図10】 版本 該当部

出本では「かかるといふ置辞は省略しているところが多い。版本は版行の際に参考の一本を見て誤りを正しているという立場からは、正しく「一条院」と改めたが、「一」は細く、しかも、書き出しのところでもあるので、何らかの事情により版本の欠損が起こったのではないかと考えるしかない。

これを、版本を書写して写本が生まれたと見る側から説明しようとする、書き出しのところにある一文字分の空白を書写者が詰めた」と説明するしかない。いくらなんでもそういうことはありうるのだろうか。

また、六冊目の御裳着の巻の途中で、写本は一行空白を置いている。これは本文的にはどういふ理由によって一行の空白を置いているものかさっぱりわからないように、版本を書写していたと仮定すれば、ありえない現象としか説明のしようがない。写本の書写者は間違いなく絵入版本ではないまったく別の『栄花物語』の一本を見て書写している。

以上具体的に本文の異同について考察を加えたが、本文の脱落は他にも多数ある。そして、この論で取り上げなかったところも含めて、すべてにわたって版本が正しい。しかも、写本の誤りはかなり程度の低いものを含む。

○季吟であることの可能性

この写本の書写者を季吟と考えることについては、その可能性を高くする要因が二つある。その一つは松村氏の研究による絵入版本の出版年である。これは科学的に根拠のある推定であり、季吟の活躍年がそこに重なることは、大いなる可能性を考えさせる。もう一つは本文の抄出という行為である。絵入版本の抄出本文は、適当に抜き出したというようなものではなく、『栄花物語』を正しく理解した人間が理解に基づいて抄出していることは明らかであり、平安時代の物語と歴史についてかなり深い正しい知識を持ち合わせていることが、抄出の条件となる。そういう位置

にいる人物として、季吟は極めて考えやすい人物である。

識語にある「季吟しるす」は科学的には根拠にはならない。

逆に、写本の誤りの内容は、この書写者を北村季吟と判断してよいのだろうかという疑問を抱かざるを得ないレベルのものを含む。そういう考えを進めると、季吟その人ではなく、季吟の弟子筋の誰かに写させたという可能性も考えられてくるが、文字を見ているかぎり、写本の書写者と版本の版下作成者とは同一人物と考えられ、季吟のもとにいわば工房のようなものがあつたのではないかと推測も可能性としては出てくる。

しかし、いずれにしても、ここまでの考察を総合する限り、写本が先にあり、その本文を正して絵入版本の刊行に向かったという順は動かし難く、その抄出本文の抄出作業を行ったのも北村季吟その人であると考えるのがきわめて順当ではないかと思われるのである。

雲英末雄氏はその著『俳書の話』において「季吟は能筆家で、仮名草子でも古典注釈書でもほとんど自分一人で自分の著述の版下を染筆している。驚くべき精力ということができよう。」と書いておられる。

その説明をこの論の趣旨に援用させていただくと、『栄花物語』についても、季吟は、本文を抄出し、絵を入れ、刊行して、江戸時代における『栄花物語』の流通にも大きく貢献したのだということができるように思われる。

執筆者がぼんやり想像してみた工房の想定は、いうまでもなく、雲英氏の見解を否定するものではない。工房の存在を証明するにはまた別の大きな労力を必要とするものであることをここにお断りしておきたい。

ただ、季吟の『湖月抄』などの古典注釈書の版面を見ているかぎり、相互に文章は当然異なるものの、文字面というか、文字の持つ表情というか、それは非常に近いものがあると感じる。その感覚だけからいえば、工房など考えずに、季吟その人の筆と考えたほうがまともな感じさえするのである。しかしながら、この文字を見た印象の話は、

学術的に論証した話ではない。何となくそのようにも見えるという程度である。

そうなってくると、「季吟しるす」の識語も一定の方向にのみ処理してしまうのは躊躇もされる。つまり、「季吟しるす」はいろいろな解釈可能であり、筆者が最初に考えたように「本を高く見せるためだ」という解釈も可能になる。ただ、見る者を騙そうとするなら、もっとそれらしくきちんと書くのが普通ではないかと思われでくる。見ていただけならわかるが、この「季吟しるす」はあまりに素朴かつお粗末に書かれている。

このように、絵入版本に季吟が関わったという線はほぼ間違いないと思われるものの、季吟自筆ということについては、学術的にはまだ距離がかなりあると判断される。しかし、文字の話は、どう実証できるか、かなりの難問と思われる。

結 論

架蔵の写本『栄花物語』を調査して、この写本はどこから見ても絵入版本を書写してこの写本ができたと説明することは不可能と思われる。絵があることから、絵入版本が版行されていたにもかかわらず絵入版本を見ないで別の抄出本文の『栄花物語』を書写したとは考えにくいと思われるので、この写本は少なくとも絵入版本より前に存在していたとして考えざるを得ないと思われる。そうすると、絵入版本が版行された時期などから、可能性として北村季吟が江戸時代の『栄花物語』享受に大きく関わっていたことが推察されるのである。

季吟は「季吟本」と称される『栄花物語』を一本所持し、その一本と絵入版本との関係は分からないが、季吟が『栄花物語』に高い関心を持っていたことだけは断定してよい。

その季吟の活躍する同時代に何人かが『栄花物語』から本文を抄出し、絵を入れ、流布させた。

本文の抄出は季吟よりも前の時代にすでに抄出されており、季吟の時代にはそれを書写し、絵を入れたに過ぎないという可能性はなくはない。ただ、少なくとも、絵を入れたのは、版行直前と思われる。そしてそれがこの写本である可能性は極めて高い。

しかし、何度も説明しているように、この本は本文が悪く、版行される際には見捨てられたのである。どういふ親本から抄出したのかもわからない。

ただ、季吟に寄せて考えるならば、季吟の手によって抄出本文の『栄花物語』が作成された。そして、抄出本文の『栄花物語』は絵を入れて刊行され、『栄花物語』の本文は大きく流布したのである。それは、この写本の本文が悪いと判断できたことによる成功であり、そのようなことができる能力を持つ人物は季吟くらいしか浮かばないというのが私の管見のなせるところである。

北村季吟は『栄花物語』から本文を抄出し、絵入の形にして、小さく読みやすい本を江戸時代の巷間に提供することに大きく関わった。その部数は知られないが、何回も刷られ、今現在も古書店で簡単に入手可能なほどであり、江戸時代の『栄花物語』享受に果たした役割は大きい。あくまで可能性の延長上ものを言っているが、とりあえずは形を作るためにそう言っておきたいと思う。

絵入抄出版本『栄花物語』は、季吟の人生の中でもっとも熟した頃に刊行され、かなり思い出深い出版になったのではないだろうか。

最後に、『栄花物語』絵入抄出版本が刊行されるまでの手順について、想定されるところをまとめておきたい。

- (1) 本文を抄出するにあたって漏れが起きないよう、やや詳しい目の内容がたどれる程度の目録を作成したと思われる。
- (2) 目録を頼りに抜き出すところを決め、フルサイズの『栄花物語』に対して印をつけた。
- (3) 本文の内容が確定したので、内容に合わせて入れる絵を考えて、位置を決め、絵師に依頼した。
- (4) 抄出写本の清書に入り、ところどころ絵の直前に散らし書きを入れた。すべての個所が散らし書きになっていない理由は分からない。
- (5) 抄出本文全体を清書し、絵の所は丁数だけ白紙にした。
- (6) 絵を貼り付けた。これで第一次抄出本が完成したといえる。
- (7) 絵入抄出本の出来が予想以上だったのか、版本にして刊行する企画が立った。
- (8) 絵入抄出写本には若干の誤りが認められたため、本文の版下原稿を作成するに当たり、参照する信頼できる一本を用意した。
- (9) 絵は、版下の原稿とするべく、一旦、本から剝がした。
- (10) 絵は先行の絵入源氏と同じく無彩色とした
- (11) 刊行にあたって、一部、絵を足した。
- (12) 目録・系図の冊を設けて充実し、跋文を付けた。
- (13) 書肆を入れた
- (14) 剝がされた絵は写本に戻されなかった。
- (15) 写本は箱に入れられていたが、後年、傷みがひどく、箱を失うことになり、箱に同梱されていた紙に書かれて

いたか、あるいは、箱書きに書かれていたかと思われる、本書への季吟の関わりを書き残すべく、奥に「季吟するす」と書き入れた。

以上である。

本稿は平成二十五年秋の中古文学会で発表したものに手を加えたものである。会場においてご意見を頂戴した貴頭に対して心より感謝申し上げます。また、本稿は、科学研究費助成金基盤研究（C）「栄花物語本文研究の新展開と受容の研究」研究代表者中村康夫による研究成果である。